

エコライフの実践者たち

濱 恵介 *Written by Keisuke Hama*

エコライフとは

エコライフ「エコロジカルな生活とは、環境を大切にしたいという気持ちで、健康で自然の摂理に素直な生活」と表現すればよいだろうか。つまり、資源を大切に利用し、環境を汚す廃棄物や温室効果ガスの排出をできるだけ抑えながら、自然のリズムで心ゆたかな生活をする、こと、と思われる。そんな生活スタイルを実践しているのはどのような人達だろう。

本稿では、環境に配慮しつつ生活している方々からつかがったお話を軸に、「エコライフ」実践の様子を紹介しつつ、そこに含まれる意味・価値などについて解き明かしてみたい。

生ゴミを減らす

身近で目に見えやすい生ゴミ処理の取り組みを見てみよう。吹田市の市街地にありながら



バルコニーでの生ゴミ処理



カバーを取って生ゴミを入れる



床の土と混ぜて埋める

小田信子さんのお宅は庭が広い。南側は果樹が茂り、北西側は菜園になっている。生ゴミ処理はそこに穴を掘って埋めるだけ。一世代前はごく当たり前だった方法である。土中の微生物によって分解された養分は植物が吸収し、小さな循環ができていると見受けられた。

三田市の郊外、お宅の裏が雑木林という山崎真理子さんの方法は実におおらかだ。まず庭の一角に生ゴミを適当にはら撒く。すると、イタチ、タヌキ、野鳥たちが来て何

がしかを食べてくれる。鶏の骨などは大に馳走で取り合いになるとか。嫌われ者のカラスも来るが彼女は気にしない。それから、食べ残し、量の減った生ゴミを土に埋める。動物たちにも餌を与えながらの処理に、他の生き物との共生を見た。

庭があれば、いろいろやり方がある生ゴミ処理も、集合住宅のバルコニーでは工夫がいる。東京都江東区の高層住宅に住む生田目武久さんは生ゴミ処理の達人だ。博多への単身赴任の時に始めた方法は、野菜の食べられるところは余さず食べ、残った部分を細かく切り刻み、プランターの土に混ぜて処理する、というもの。

東京にもどってから生ゴミ処理は本格化した。ダンボールに米ヌカと腐葉土で床を作り、細かく刻んだ野菜クスを混ぜる。上手にすれば発熱し冬でも分解は進む。

「最近では生ゴミを外に出すことはめつたにあ

住生活の省エネルギー

りません。ダンボール箱の内容物もほとんど増加してないのは不思議です」と語る。確かに生ゴミの重さの大半は水分、水分以外の組成もほとんどは微生物が水と二酸化炭素に分解してくれるわけだが、実践者のみ実感できることだ。

うまく処理すれば家から出さずにすむものを、現実にはトラックで運び、焼却にも化石燃料を使うことに、生田目さんは大いなる疑問と納得しかねる気持ちでずっとならした。その矛盾に立ち向かい疑問を解消することで心の充足さえ獲得しているのだ。

「独特の生ゴミ臭が全くしないのは、これまた不思議なほどです。今はダストシュートが使えるので、各家庭での生ゴミ保管は不要なのですが、いずれ使えなくなりそうなので、この処理方法はなかなか優れたものと思えます。各家庭での食習慣や事情がいろいろあって、誰もができるとは一概に言えませんが、来客には大いに推奨しています」と語ってくれた。

野菜クズは細かくした方が早く消えるので、彼はキッチンバサミで切り刻む手間を惜しまない。微生物が活躍するのを手助けしている、という気持ちを短歌に詠んだ。

目に見えぬ生き物なるが日々えさを

与ふるごとく生ゴミ処理す

小片に切りて彩りにぎやかに

野菜クズらはサラダのごとし

太陽エネルギー利用

太陽エネルギーを活用することは、二酸化炭素排出を減らすのに有効だ。光や熱を直接享受するほか、太陽光発電、太陽熱温水器が身近だし、風力、水力、バイオマスも根源は太陽エネルギーである。中でも太陽光発電は、住宅での普及が急速に進みつつある。ここでは、集団的な取り組みを二例紹介する。

東京・神奈川地区を拠点とする生活クラブ生協の組合員で太陽光発電設備を設置していた有志が、二〇〇一年、CELIC(セルクックリー)エネルギーライフルクラブという団体を立ち上げた。会員は約九〇名、毎月の発電状況を集約しデータを共有化している。

代表の大野喜久子さんも、相模原市の自宅に三・二六kWのシステムを設置して計測に参加している。大野さんは、太陽光発電との付き合いと会の運営についてこのように語っている。

「自然の恵みを実感しながら電気エネルギーを自給できるのは大きな喜びです。日々変わる発電量はまるで生きていくように可愛く計測が楽しみです。しかし、設備の置かれた状態、会員のデータにはどれ一つとして同じものがなく、発電量比較の難しさを感じています。一般に太陽光発電に関する情報はまだまだ少なく、CELCのように九〇件以上のデータ情報が集まり、自慢話はもちろん、経年変化や心配ごと等も共通の言葉で話し合える仲間がいることは嬉しく思います。」

ワーカーストップ「エコテック」は、自然エネルギー普及の活動をしているNPO法人(代表、都筑建さん)で、川崎市に本部を置き、東海・関西・九州の三支部がある。毎月発行される「Sun Sun エナジー」は、同社が設置した太陽光発電システム所有者を対象とした会報だ。

会員の住まいは「発電所」と呼ばれ、その数は約四〇〇。発電所名は「所長」と家族の思いが込められていてなかなか面白い。毎号に各発電所の発電量、売電量、買電量、消費量が表になって掲載される。また、「みんなの声」欄には、発電所長たちからの意見や感想が掲載されている。中には専門的な分析をした稿もある。

いずれの例も、エネルギー量を数値にして実感するとともに、一人で取り組むのではなく、情報を発信・共有化し、仲間と話題を共にすることを楽しんでいる様子が見える。

車をなるべく使わない

お話をうかがった方々には、みな自家用車の利用を抑えよとする気持ちがある。車でなければ不便な場合に限って使い、なるべく自転車やバス・電車を利用するという生活が定着している様子だ。中には最初から車は持たないという堅い意思の人もいる。

山崎さん家族は自家用車を持たない。住まいが便利な場所にあるわけではない。大阪から快速電車で五〇分の最寄り駅から歩いて約二〇分。それでも日常生活の移動はほとんど自転

車で済ませる。買い物は、生協の協同購入と近隣の有機野菜の宅配でまかなうが、時には自転車で二三口離れた街中へ。高校への通学は、最寄り駅までと下車駅から学校へ計八キロ、早朝に部活動がある日は電車がないので、二〇キロの山越え道を自転車で行く。試練に耐えた息子に、山崎さんは「お蔭さまでとても良い子に育ちました」と満足そうだ。

最近、私も車を手放した。一四年前使った割には走行距離も短く状態は良かった。しかし二人になつた家族にワゴン車は大き過ぎるし、たまたまこの車を欲しいという人がいたこと、新しい車で買いたいものがなかったことなどが重なつたからだ。

「車が要する時はタクシーとレンタカーですませられるはず。まずは経験してみよう」と伴侶とも意見が合った。それから数ヶ月、まだ特に困ったことはない。車の便利さをよく知った上での所有放棄であるが、利用を拒否しているわけではない。車はなくなつたが、持たないことの気安さと、「こんどの遠出で借りる車種は何にしよう」という期待感を得た。

緑との付き合い

自然を身近に、自然との共生、という表現がある。私も無意識のうちに自分を自然と対置させている。この延長だろうか、人工的な環境に自然的な要素を見て安堵する感覚も一



バルコニーを覆う緑

般的だ。暮らしにおける「自然」は、植物とその生育基盤である土や水などがまず思い浮かぶ。

夏の盛り、小田さん宅の南側は緑で覆われる。果樹の樹冠を越え三階にまで伸びたキーウィの葉が窓とバルコニーを覆い、涼しげな陰を作っている。小宮さんの桑の大木もきつと枝を広げ、葉を茂らせていることだろう。

晩秋から早春にかけて、山崎さんは身近な雑木の手入れをする。樹木に巻きついた蔓を外し、枯れ枝を拾い地面をきれいにする。薪ストーブの焚き木が手に入り、次の春にはきれいな草花が咲くとのこと。

吹田市の喜田久美子さんも、自然への思いが強い一人だ。「若い頃は自然と生活は別物、と思っていました。今は自然を注意深く見ることをベースに、環境問題を考えることができるようになりました。自分が自然の一部であることがよく見えます」と語っていた。

ひとりで・みんなで・ 未来の子たちも

ひとりで、エコライフは可能だが、こころざしを同じくする仲間と一緒に実践すればより楽しくやれる。そのメリットは、共通の話題が持てる、問題解決の情報が得られる、そして社会運動にさえ発展する、というところか。

生協活動では、食品の安全・健康、包装容器の分別回収などに積極的な動きが見られる。相模原の大野さん、豊中の新聞さん、吹田の小田さん、喜田さんたちに出会って、消費者団体を通じて環境行動の広がりを感じた。

一方、地球レベルの環境問題を語るには、我々の生活を世界の中で位置付けることも必要だろう。先進諸国の暮らしかなく、いわゆる発展途上国の人々のことも考えに入れることで、当たり前と思っている今の生活スタイルが浪費的と映るかもしれない。

「持続可能な発展」の核心は、『将来世代が自らの欲求を充足する能力を損なうことなく』という部分である。環境に配慮した生活とは、未来の人々に考えを及ぼすことでもある。

エコライフの実践者の様子から、みんなで考

えることの有益さと、視野を広く、視線を遠く保つことの重要さを再認識した。

エコライフを普通の暮らしに

「エコライフ」と言つと、今はまだ、一部の人の趣味的な暮らし方」と見られかねないが、本来は何も特別なことではない。環境を大切に考え自分ができることを実践したら「エコライフ」と、他人が呼ぶだけかもしれない。忘れかけていた昔風の暮らしや、簡素な暮らしの価値を再発見しただけかもしれない。

実践者との出会いを通じて、「エコライフ」の真髓やそれを支える要素が見えてきた。

エコライフの実践者は強い「環境意識」を共通して持っている。

環境負荷を減らす方法は様々で、こだわりを持ち実践する領域には個性がある。所得水準はエコライフと比例関係にならない。所得が高いと、省エネ設備への大きな投資が可能だが、一方で節約への制約が緩みやすい。

几帳面で精密なエコライフもあれば、気軽でのんびりしたエコライフもある。自然環境に恵まれた一戸建てもあれば、高密度な都心の集合住宅もあり、居住環境は違っても様々なエコライフは可能である。

空間的にも時間的にも遠くを見る眼

自然への親しみ・畏敬が環境意識を育てる。

ここに紹介した方々は、いずれも自分の生活スタイルに主張を持ち、周囲や将来の人に迷惑をかけたくないという心意気を感じられた。また「不自由を忍ぶ、面倒なことをしている」という感覚はなく、普通のことと受け止め、手間をかけることを楽しんでいる様子さえうかがえた。その行動を支える原動力は、「環境を大切にしたい」という意識にあると見た。

マイ・シャリズムに流されず、環境意識が高く実行力のあるこのような人々が、これからの生活スタイルを先導することを期待する。

そして、「エコライフ」と取り立てて呼ばれなくても、環境を壊さない生活がごく普通のライフスタイルになる日の遠くないことを祈る。

(大阪ガス エネルギー・文化研究所 研究主幹)



集めた枯枝は新ストーブの燃料に